

The Magnif

東京大学大学院 新領域創成科学研究科 環境学専攻 助教授・博士(工学)

清家 剛

ラホヤのソーク研究所

「荒野の七人」という映画をご存じの方は多いと思う。黒澤明監督の名作「七人の侍」(1954年)をもとに、「OK 牧場の決闘」(1957年)など西部劇の巨匠ジョン・スタージェンス監督が、舞台をメキシコに置き換えてリメイクした1960年の西部劇の傑作であり、私がいちばん好きな娯楽映画の一つである。なんたって、ユル・ブリンナーやチャールズ・ブロンソンという名優がずらりと並ぶ中に、スティーブ・マックイーンとジェームズ・コバーンという私の大好きな二人が渋い役で登場する作品なのである。「七人の侍」の方がよかったという意見はあるだろうが、すばらしい娯楽作品ということには、間違いはないと思う。

さてこの映画、西部劇好きの私にとっては、小学生の頃から何度もテレビで見た作品だが、西部ってどのあたりだろうと思ったことはありません? やっぱカリフォルニアのあたりかしらと、あまり実感なく思っていたのが本音なのだが、この映画の最初に、メキシコの貧しい村を荒らす族どもが、「サ

ンファン」という地名を口にしていてに気づいたのは、私が最初のアメリカ旅行から帰ってきた直後にたまたまNHKで見た時だったんです。

サンファンとは、<San Juan>と書くラテン系の地名によくあるスペイン語読みの発音で、カリフォルニア州はロサンゼルス以南、オレンジ郡の南端にある地名である。映画の中では族たちが、そこに教会があり、年に2回司祭がやってきてミサがあることと、そのお宝を自分たちが盗んだことを自慢するところから話が始まっている。そのサンファンに行く機会があったので、そうかあのあたりが西部劇の地域なんだと感心したのである。そしてまさしく、映画の会話に登場した大きな教会を見ることが出来たのでした。

サンファン、あるいはサン・ホアンと日本語では記述することもあるが、ここには18世紀建立の古いスペイン統治時代の教会、かつてカリフォルニア最大を誇ったサン・ホアン・カピストラノ伝道教会がある。ああ、ここが西部劇の舞台

なんだなあ、なんてことはそのときには思わなかったけど、アメリカ合衆国成立以前の風景を見ることは、それなりに感動的でした。1806年建造の教会は地震で失われたが、18世紀の建造物を一部残しており、西部劇のころの面影があって、風情がありました。(写真①、②)

ほんとはこの教会を見ることが出来たのは偶然で、本来の見学先はマイケル・グレイブス設計のサン・ホアン・カピストラノ地域図書館。1983年完成のこの建物は、この地域のスパニッシュ・ミッション・スタイルを踏襲したというデザインであり、これを明るいカリフォルニアはオレンジ郡の光のもとで見たかったのです。期待を裏切らず、その地域に根ざしたデザインは、内外装とも柔らかく、派手なグレイブスのデザインもそれなりに優しい仕上げのおかげでまとまっている、心地よいものでした。壁の素材感はまさしく近くの教会のそれと同じで、こうした地域で統一されたデザインには味があるかと、感動したものです。



Sevent

(写真⑧)

そのオレンジ郡南端のサンファンをもう少し南に下ると、カリフォルニアでロサンゼルスとサンフランシスコに並ぶサンディエゴという大都市があります。そのサンディエゴの北、オレンジ郡から近いところに、やはりスペイン語の発音のラホヤ<La Jolla>という地域があります。そこに、スパニッシュ・ミッション・スタイルとはほど遠い、コンクリート打放しと木製建具によって作られた幾何学的な形状のソーク研究所があるのです。

この地に1966年に巨匠ルイス・カーンの設計で建てられたソーク研究所は、起伏に富む緑豊かな丘の上、太平洋を望むほとんど崖の上のような場所に、コンクリートの壁体と、チーク材の建具のコントラストが、精緻な形態で並ぶすばらしい建物です。海に向かった中庭の両側に4階建ての研究所棟が並び、出入りのある豊かな、

しかし堅い表情に、印象的な45度ふったコンクリート打放しの壁面がリズムカルに並んでいる。開放的な中庭には水が配されて、乾燥したカリフォルニアの気候をより強調したデザインとなっており、そのおかげで、中庭側の通路や日陰はより涼しげに感じることができる。外部のコンクリートの印象に比して、内部は木をふんだんに使った柔らかいインテリアとなっている。(写真④~⑫)

一見コンクリートの無機質な空間と思われがちですが、現地を訪れると中庭は海からの風の通り道となっており、乾燥した土地にさわやかな風が通り抜ける道を造っているようで、思ったより自然を感じることが出来ました。それどころか、快晴の中しばらくたたずんでいると、突然海からの湿った空気と雲とも霧ともつかぬ灰色の空間に包まれ、雲の中にあるような状態になり、それが10分もすると何事もなかったように去っ

ていくという不思議な体験をしました。あまりに突然の出来事で、写真も撮らなかったのですが、とても感動的でした。「自然との対話」なんて言う言葉は、恥ずかしくてあまり使いたくないのですが、この個人的な体験にだけは、使ってもいいかなと思っています。

それにしても、カーンの作品はすばらしいものばかりです。アメリカを40日間旅する中で、ニューヘブンでイエール大学を見て、フォートワースで美術館を見て、もうこれ以上はないという感動をしたと思ったのに、最後のカリフォルニアのソークでは、自然の力を取り込んだ全く別の感動を与えてくれました。

ソーク研究所そのものは、リチャード・ギア主演の「心のままに」(原題: Mr. Jones)という映画で、主人公の純真な男ジョーンズが運ばれる精神病院として、たっぷり映画に使われています。その明るい気候と、コンクリートの冷たさの

コントラストが、病院の設定にあったのかなとも思います。しかし、実際の建物で私が感じたことは少し違ってまして、サン・ホアンのスパニッシュ・ミッション・スタイルも、ラホヤのソーク研究所も、時代の差はあれ、その土地の気候をうまく反射することができる、地域に根ざしたデザインだったと思ったのです。土壁と比べても見劣りしないくらいにコンクリートという素材もすばらしいねえ、と感じさせてもらえる建物でした。「七人の侍」が「荒野の七人」にリメイクされても、全力を尽くした作品だったから、日本の話だろうが西部劇だろうが、話のおもしろさは十分発揮できたようにね、なあんて、さすがにこじつけもすぎましたかねえ。でも、映画を自由に楽しんでよいように、建物も自由に感じることであれば楽しいものです。



写真① サン・ホアン・カピストラノ伝道教会
写真② サン・ホアン・カピストラノ伝道教会
写真③ サン・ホアン・カピストラノ地域図書館 外観
写真④ ソーク研究所の中庭(海側からの眺め)
写真⑤ ソーク研究所の中庭(陸側からの眺め)
写真⑥ ソーク研究所の中庭(陸側からの眺め)

写真⑦ ソーク研究所の研究棟外観
写真⑧ ソーク研究所のコンクリート打放し
写真⑨ ソーク研究所のチーク材の木製建具
写真⑩ ソーク研究所の中庭に面した通路
写真⑪ ソーク研究所内観
写真⑫ ソーク研究所の吹き抜け